

東風見聞録

平成18年7月発行 通巻第14号
イーストウインドプロダクション
<http://www.east-wind.jp/>

巻頭コラム

吼えろ、日本人！！

田中正人

今年6月、世界中がサッカーのワールドカップに盛り上がった。私自身はサッカーに興味があるわけでもなく、世界はるか日本チームのゲームも一部分しか見ていない。また、その後の中田英寿選手の引退にも興味がなかった。しかしある日、某週刊誌の見出し[中田英寿、ゴン中山に『ジジィ、走れ！』発言…]に目が留まり、惹き付けられた。これは中田選手が練習試合中に同じチームの先輩選手に向かって言ったセリフらしいが、中田選手のこの発言は、世界に挑戦する人間として非常に興味深いものがあった。

中田選手は「孤高の選手」とか「傲慢選手」とも言われている。確かに、一般的に見れば先輩に対して、とんでもない暴言であるだろうし、人によっては「スポーツマンとして失格だ」と評価するかもしれない。特にメディアはこういった彼の言動を「横柄な態度」とたたいた。しかし私は、この発言に対してトヤクク言う人は彼の表面しか見ていないと思っている。なぜなら『ジジィ、走れ！』は中田選手の信念であり、世界で優勝するぞという彼の強い熱意の表れだろう。私は、その週刊誌の見出しから今回のワールドカップの結果や中田選手について非常に興味が沸いた。



写真：中田英寿の公式サイトより

中田選手は心身ともに強靱であり、広い視野と強い信念を持った素晴らしい選手だと思うが、それだけに他の選手に対しても高いレベルを求めて厳しい態度を取ってしまうのだろう。中田選手にも、相手の気持ちに配慮した言い方をするなど改善するべきことがあると思うが、信念がなかったり甘えた相手に接する上ではとても難しい要求だと思う。

負けが続いた読売ジャイアンツの原監督は、「選手を擁護し、フォローするほうがプラスになるという信念」があるそうだが、今となってはその信念も揺らぎ気弱になっているという。相手に優しく接してヤル気を引き出すというのは理想だが、その実践はかなり難しい。相手が中田のような自覚のある選手なら楽だろうが、信念がなかったり自覚の乏しい甘えた選手であれば、単に褒めるだけでは相手がますます甘くなったり、最悪なのは監督の信頼が低下して舐められてしまうことだろう。それくらいだったら、人前で叱咤する野村監督のほうがマシである。自分の信念とやる気をどのように相手に伝播させるかは難しい課題だ。人間的に優れた人ならば、優しくやる気を引き出しながら相手に影響を与えることができるかもしれないが、それが出来ない大方の人は、自分の信念を強く打ち出して相手にも厳しく接していく方法しかないと思う。現在の原監督のようになってはいけない。

世界でトップになるとか、ある目的を持った組織ならば、メンバー全員がしっかりと目的意識を共有することが大事である。しかし、組織の中にはリーダー的に積極的に考えて行動する人や、受身的な人も存在する。その受身的な人をどう引き上げるかが積極的な人に必然的に掛かる課題となる。対人関係はいろいろ考慮すべきことが多いが、まず信念を通して吼えることから始まると思う。中田選手問題のようにチーム名とは、彼のやり方の是非を問うのではなく、真剣に吼えている内容の真意をはかるべきだったのではないだろうか。

日本人は、正しいことを言われても、感情的に気に入らなければ拒絶してしまうことが多いと思う。良いことは良いと認め、悪い点は指摘すればよい問題だと思うのだが、完全に拒絶してしまったら進歩はない。自分に信念がない人がそういう態度を取るのではないか。



写真：中田英寿の公式サイトより

逆に中田選手を「生意気」とか「鼻に付く」という批判は考え方が小さすぎるのではないだろうか。ならば他の選手は中田選手の持つ信念以上に世界に通用する信念を持っていたのだろうか。ただ中田選手の言動に対し「むかつく」「言い方が悪い」というのでは、彼に反発する感情だけで、それではプロ選手とは言えないどころか、仲良し組の甘ちゃんチームである。プロである以上、勝つ事に対しハンガリーでなければならぬ。今回の日本代表チームの戦いは、まさに日本人の特徴を良く表していたのではないか。これが私の感じたワールドカップであった。

今の日本で、中田選手のような尖った考え方は少数派なのだろう。だから中田選手はチーム内で浮いた存在になってしまう。日本人という国民は、中田選手のような尖った人間を受け入れられず、仲間の和を大切にする社会組織が多くはないか。日常生活はそれでいいかもしれない。しかし競技の世界では、そんなチームでは世界で優勝できるのかと疑問を持つ。勝利への高い意識レベルと妥協を許さない強い信念を持った人間たちが集まってこそ、世界で名を残すのだろう。そして皆もっと吼えるべきである。それだけの強い信念を持った人が日本を引っ張って行くのだから。

5月28日～30日 中国杭州アドベンチャーレースにて優勝

チームイーストウインドは中国杭州で開催されたアドベンチャーレースに招待選手として参戦した。レースは3日間のステージレースで、種目はランニング、マウンテンバイク、オリエンテーリング、インラインスケート、ラフティング、ロープアクティビティなど。出場チームは20チームで、中国から13チーム、7チームがイーストウインドを含め、ニュージーランドやロシアなどの諸外国からの参戦であった。

1日目、チームイーストウインドは、主催者によるルートミスがあったものの、トップと5秒差で2位に就いた。2日目、次位と11分の差をつけダントツの1位。そして最終の3日目、イーストウインドは逃げ切って優勝を果たした。これが次に待ち受ける【プライマルクエスト】への自信となった。



6月5日 トークライブ～アドスポのタベ～



新宿ロフトワン(ライブハウス)にて、アドベンチャースポーツマガジン発売記念『アドスポのタベ』が開催された。入場者は123名。立ち見も出るほどの盛況ぶりであった。第1部はイーストウインドによって中国杭州レースの優勝について日本テレビ川上順氏の映像を交えながら報告し、6月末に参戦する海外最高峰のアドベンチャーレース【プライマルクエスト】についてを語った。第2部は鍋木毅(KOCCI)VS横山峰弘(チームイーストウインド)が、トレイルランの魅力についてたっぷり語った。

司会はスポーツcommentatorの後藤新弥氏。先日60歳を過ぎ退職されたばかりだが、意欲的に新しいスポーツに挑戦し続けるアクティブライターで、選手の気持ちやレースへの意気込みを見事に引き出してくれた。

6月25日～7月4日 フライマルクエスト2006

2004年に死亡事故が発生した【スバルプライマルクエスト】。原因究明と事故の引責で1年間を置き、今年主催者とスタッフを一新して生まれ変わった【プライマルクエスト】。開催地はアメリカ・ユタ州と決定した。そしてこの新たなレースに出場するのは世界中から集まる89チーム。アジアからはチームイーストウインドのみが参戦。40度もの炎天下で、800キロにも及ぶ砂漠地帯を10日間で走破するという最も過酷なレースとなった。

チームイーストウインドは、第1ステージ早々、乗馬セクションで駒井選手がわき腹を馬に蹴られ腰骨を骨折。横山にも他チームの暴走馬が激突。頭部に怪我を負った。にしかし両選手はあきらめる事なく、これからいつ果てるとも分からないレースに挑んだ。

灼熱の大地、過去最長ロープ(18キロ)を使用したキャニオニングセクション、疲労、不十分な睡眠、チームワークの崩れ、足のできた水疱(マメ)・・・さまざまな状況下で、20チームがレースを棄権、1チーム失格、27チームが時間制限にかりショートカットとなった。その中でチームイーストウインドは19位(完全完走)という結果に終わった。

「次のレースでの具体的な目標は5位以内である。今回怪我がなかったら10位前後の戦いになっていたはず。それは明確に実感できた」。自分自身もマウンテンバイクで転倒し肋骨を骨折したキャプテンの田中正人の言。今回のレースでメンバーたちは新たな自分を発見したようだ。



(左)想像を超えたロープセクション。コースディレクターはアドベンチャーレースのレジェンド・ジョンハワード氏。(中)レース後半は睡魔との闘い。わずかな時間で睡眠を取る。(右)水疱(マメ)ができた佐藤選手の足。多くの選手が水疱に苦しんでいた。

田中正人がアドベンチャーレースを始めて12年目。多くの方にご支援を頂き、心より感謝をしています。田中をご支援くださる方々と久しぶりに酒を酌み交わしながら多彩な方面の談義をマネージメント竹内靖恵がレポートします。



プロラフティングレーサー 浅野重人さん

日本初のプロラフティングチームを結成した浅野氏は、田中正人の活動母体ともいえる群馬県みなかみ町のラフティングツアー会社【カップクラブ】で田中と出会う。互いにカップクラブのガイド業を経て、それぞれプロフェッショナルな道を切り開くパイオニアとなる。両氏良き友人でもある。

監督は常に選手より成長しなければならない

田中 「まずは浅野さん率いるチームテイケイのユーロカップイタリア大会優勝、おめでとうございます」

浅野 「ありがとうございます」

田中 「浅野さんは自らもラフティングレーサーでも行けると思うのですが、なぜ監督に専念しているのですか」

浅野 「長い目で見てきちんとした組織にしたかったんです。最初は選手兼監督をしていたのですが、『俺がやる！』という選手の気持ちばかりが前面に出てしまい、監督としての役割との切り替えができませんでした。葛藤はありましたが、これではイカンと思い監督業に徹することになりました」

田中 「なるほど。ラフティングと違ってアドベンチャーレースは、スタートすると山や海に消えてしまう。選手はその場にはないと分からないから、僕はフィールドに出ながらレース全体を見るんです。すべてを任せられる人が出るまでは、僕は選手・キャプテンを続けます」

浅野 「監督やキャプテンにとって大切なものは『負けないこと』。負けてつけ込まれてしまったら統率が取れなくなり、チームは機能しなくなってしまいます。」

田中 「チーム・テイケイの選手は浅野さんと年の差がありませんが、統率は難しくありませんか？

浅野 「人生経験の少ない年下相手のほうがやりやすいとは思いますが、選手が向上すれば、監督は更に向上していかなければいけない。自分が成長しなければチームは成長しませんから。だから定期的に意識の高い人たちに会ったり、勉強をして人間力を高めることはとても大切だと思います」

世界に出たいからラフティングをやるんだ

田中 「今後のチームの目標は？」

「ラフティング世界大会で優勝すること。そしてその後には常勝することです。一度の優勝も凄いけど、それを続けていくことは遥かに凄いことです。うちのチームは日本では常勝していますが、あくまでも目標は世界一なので常に上を目指して頑張るからです。世界で常勝するなんて、どれだけ凄いことか今は想像ができませんが、だからイチロー選手が日本にいる間は首位打者を一度も渡さなかった。そしてメジャーに行っても成績を出し続けているということは何にも増して凄いことだと僕は思います」

田中 「世界大会優勝や、世界大会日本誘致（東風見聞録13号参照）は使命感なのですか」

浅野 「やりたいからやっていますから、あまり使命感という言葉はしっかりこないです。どんなにまわりから期待されても、自分の事とは違うな、と思ったらやりませんからね。チームテイケイ結成当初は『日本のラフティングの事を真に考えるのであれば、自分が世界大会に行くのではなく、国内で初心者やクラブチームを教育して底辺を育てるべきだ』と言われましたよ。それはそうかもしれない。でも僕はそういうことをやるよりも世界の高いレベルを目指したいんですよ（次へ）」

浅野 「（続）我々が世界で培った一流の技術を国内で還元することは普及にも繋がると思いますよ。現に今日本のレース・ラフティングは学生を中心にうちのチームを目指してどんどん力をつけています。1年前の僕らだったら負けているほど彼らのレベルは上がっています」

田中 「スタートが【人のため】は、偽善なのかもしれない」

浅野 「なんか胡散臭いですよね（笑）責任を感じることは忘れてはいけないが、自分の姿勢や信念を崩してはいけない」

田中 「信念を持ってやっているうちに、自分に似た考えの人に出会っていきますよね。そういう人たちとつきあうのも自分自身の向上になりますね」

浅野 「そういう人たちが自分のまわりにどれだけいるかは大事ですよ。一緒にいて心地よい空間を求めるといいますか。人はそれぞれ進むべき方向性が生まれながらにして決まっていると思います。自分の方向性に素直に従ったほうが幸せになれると思います」

やるだけやれば結果は後からついてくる

田中 「選手の力を発揮させる秘訣は何ですか？」

浅野 「これは特に本番での勝負で言えることなのですが、上昇思考や負けん気はとても大事ですが、あまりにも勝つぞとか、負けないぞとか、気負いすぎて不自然な状態になると力は発揮されませんね。試合前や本番では必ず緊張するのが当たり前なので、まず緊張している状態の自分を受け入れること、その上でなるようにしかならない気持ちを持ってリラックスする事。そして結果は後からついてくる、やるだけやったらそれが結果、と思えば少し気楽になり、力が出せる状態に入りますね。まあ、そうは言っても緊張しますが」

世の中面白いことがいっぱいある

田中 「僕はよく『好きな事で食っているからすごい』と言われますが、浅野さんも言われませんか」

浅野 「言われますね。僕は『好きな事が見つからない』って言うのがよく理解できないんです。世の中面白いこといっぱいあるのに（笑）僕は好奇心旺盛なんだと思います。以前は選手が絶対的に面白いと思ったのですが、今では監督業も面白いとおもっています」

田中 「60歳の浅野さんは何をしていますか？」

浅野 「正直、今はそこまで先を見れていませんね。でも本当は見ているほうが良いと思います。自分の人生の長期のビジョンもあったほうが良いと思う。でも今はもっと目の事に視野が広がっていてそれができていないです」

田中 「ズバリ！浅野さんにとってラフティングとは？」

浅野 「自分の人生を豊かにしてくれるツールです」

浅野 重人(あさの しげと)

1974年南アフリカ出身。プロラフティングレーサー。国内唯一のプロフェッショナル、チームテイケイの監督を務める。19歳でオーストラリアに行き、ラフティングと出会う。現地でトレーニングを受け、史上最年少ガイドとなる。95年ラビッドマスターズ結成。2002年よりテイケイ(株)の協賛によるチームテイケイを設立。

チームテイケイ公式サイト: <http://teikei.race-rafting.jp/>

Adventure Racing Club KOCCI

今月の<<KOCCIの顔>>



芝田 敏仁(しばた としひと)

アドベンチャレースに初めて出たのは2001年の夏。知り合いが主催するレースに借り出される形で内容も良く理解せぬままに参加した。その後暫くは年2夏冬のその大会に出るだけだったのだが、徐々に知り合いが増えると共に参加数も増え、今では年20以上、2週に1回は参加するまでにどっぷりとはまっている。

何でここまでハマってしまったのだろう？

自然の中で身体を動かす爽快感、長時間競技をやり通すこと達成感、それを仲間と分かち合える共有感、とそれに加えて”クリエイターとの知恵比べの楽しさ”も大きい！アドベンチャレースはまさに「旅をしながらイベントをクリアするロールプレイングゲーム(大枠の決められたストーリーの中で自らプロセスを作り上げるゲーム)」。そろそろ長い旅に出たいなぁと思っているので旅の仲間募集中！



PQ報告会&アドベンチャーレーサーの集いin名古屋

来る8月6日(日)17:00より名古屋市にて「プライマルクエスト」についてチームイーストウインドの主将・田中正人が報告&講演をいたします。

アドベンチャーレースの魅力、海外レースの驚愕さ、チームリーダーとしての使命、そしてなぜ戦い続けるのかなど、田中がこれまでに経験した事をすべてお話しします。この機会にアドベンチャーレースの世界を知り、新しい世界にチャレンジしてください。

【日時】2006年8月6日(日)17:00~20:00

【会場】「レストラン 葡萄畑」<http://www014.upp.so-net.ne.jp/budoubatake/budoubatake.top.index.html>
名古屋市中区丸の内三丁目21番32号 太田ビル2F(パーティールーム) TEL 052-961-4210

【参加費】お一人 5,000円(バイキング・飲み放題)

【定員数】50名

【申込先】申し込みはこちらから <http://www.east-wind.jp/kocci/modules/eguide/event.php?eid=17>

【問合せ先】講演内容について 竹内靖恵 info@east-wind.jp 090-7240-4

会場について 野畑清敬 nova@katch.ne.jp 090-3386-0018

Special Thanks

チームイーストウインドのプライマルクエウスト出場にあたりご協賛くださった皆様、心よりお礼を申し上げます。

テイケイ株式会社様

尾西食品株式会社様

日本たばこ産業株式会社

株式会社ゴールドウイン様

インフィニティ株式会社様

有限会社カップクラブ様

カシオ計算機株式会社様

有限会社パワースポーツ様

発行元: イーストウインドプロダクション田中正人・竹内靖恵)

群馬県利根郡みなかみ町鹿野沢637-M302 TEL&FAX 0278-72-9292